

谷崎潤一郎研究

——『吉野葛』という〈歴史小説〉——

坂西紀美

現在では高い評価を与えられている谷崎潤一郎の『吉野葛』の作品も、昭和六年に「中央公論」に発表された当時は正当な評価を下されることのなかった作品であった。しかし、昭和三十年代の伊藤整氏の評価に始まり、^{注1}昭和五十年代になると平山城児氏が作品中の資料や体験の追跡を徹底的に試みたり、永栄啓伸氏らにより「母恋い物語」の系譜としての位置づけが行われた。^{注2}また平成に入ると小森陽一氏などによって、『吉野葛』の〈語り〉の構造についての詳細な分析が行われている。^{注3}このような流れを踏まえ、^{注4}た上で、本論では作品の構造的な語りの問題を視野に入れながら、『吉野葛』というテキストを細かく読んでいきたい。

まず今までの研究史において言われてきた、「私」の歴史小説構想の失敗から津村の「母恋い物語」への移行という作品のとらえ方への疑問がわいてくる。果たして本当に「私」の歴史小説構想は津村の「母恋い」物語によりよく進むためのプロローグの役割

でしかなかったのだろうか。^{注5}

「私」は『吉野葛』の作品冒頭において「此れだけ材料が集まっていれば、実地を踏査しないでも、あとは自分の空想で行ける」というように作品を書く上での材料について調べられることはすべて行ったという認識から、歴史小説完成に対する自信をのぞかせていた。しかし友人津村の誘いとはいえ吉野行という小説完成のためには絶好の機会を与えられておきながらも、結局はそのことが原因となって当初の歴史小説構想を「材料負け」などという到底腑に落ちない理由で断念している。そしてその書き記されなかった歴史小説の代わりとなる作品が『吉野葛』というわけである。それでは『吉野葛』という作品を、「私」が書き記すことになった意図は、いったいどこにあるのだろうか。吉野での「私」の一連の経験を見てくると、歴史小説構想の失敗を露呈し、作家としての「私」の立場も危うい状況に自ら落とし入れるために書か

れたのが『吉野葛』という作品とは考えがたい。

本論ではこの当初の歴史小説構想の挫折と、津村の「母恋い」の物語を共に描き出したという構造に注目していきたい。書き記されなかった歴史小説構想をあえて書き記し、津村の「母恋い」の物語と並列して描き込んだところに『吉野葛』が書かれた理由が示されているのではないだろうか。作品の流れから見て当初の歴史小説構想が挫折した背景には、吉野行とそこで出会った大谷家の人々や、津村の話しが影響しているということは間違いないだろう。吉野で体験した様々な出来事が「私」の当初の歴史小説構想に変化を及ぼしたのである。そしてその変化の過程を描き出したのが『吉野葛』という新たな意味での〈歴史小説〉なのである。

一 「私」の当初の歴史小説構想

まず『吉野葛』は、完成するはずであった自天王を中心にした後南朝に関する「私」の歴史小説構想から書き始められる。「私」は幼少時代から「太平記」を愛読し、歴史に対する興味をかなり以前から持っていた人物である。

以上の事柄は書物に依つて多少の相違はあるのだが、南山巡狩録、南方紀傳、櫻雲記、十津川の記等にも皆載つてゐるし、

殊に上月記や赤松記は當時の實戦者が老後に自ら書き遺したものの、或はその子孫の手に成る記録であつて、疑ふ餘地はないのである。

(中略)

而も據り所のない空想ではなく、正史は勿論、記録や古文書が申し分なく備はつてゐるのであるから、作者はたゞ與へられた史實を都合よく配列するだけでも、面白い讀み物を作り得るであらう。が、もしその上に少しばかり潤色を施し、適當に口碑や傳説を取り交ぜ、あの地方に特有な點景、鬼の子孫、大峰の修驗者、熊野參りの巡禮などを使ひ、王に配する美しい女主人公、——大塔宮の御子孫の女王子などにして、——
——を創造したら、一層面白くなるであらう。

このように「私」の歴史小説構想の土台に据えられるものは、「私」が最も信頼のおける情報源であると考えている実戦者の手によつて書き記されたものや、専門の歴史家と呼ばれる人々に認められている歴史書や、教科書の中に書き記された「史実」である。「私」はそういった印刷され流布したテキストを盲信している一人である。歴史の事柄に関わつたとされる誰かの手によつて書き記されたものである歴史書を手にすることで、自分の目の前には存在し得ないにもかかわらず、書き記されているだけの事柄に対して疑

間を感じることもなく頭から享受している。テキストに「書かれているもの」ならば歴史の在り方として唯一絶対のものだととらえているのである。

以上のような考え方は、「私」のとらえている歴史的事実と伝説の関係からもうかがえる。「私」にとって伝説は、「史実」とは全く関係のない絵空事であるというとらえかたをしているので、伝説が「史実」の中に入り込むことを絶対に許していない。それは伝説が歴史書とは違って、過去の事柄が起こった時点で「書き留められたもの」でなく、人々の口から口へと「語り伝えられたもの」であって、発生源を特定できないと考えるためである。そこには書き記された歴史書とは違って、様々な人々の口から口へと伝わるため、現在に伝わってくるまでには最初の情報からの改変も行われた可能性が見える。印刷という技術が発達した時点にくらべると伝説の持つ伝達手段の不安定さが、歴史書とは異なった性質のものであるとする「私」の考えにつながるようだ。

「私」が自分の作品の土台にしようとするものは、すべて書物である。題材となる自天王が存在していたといわれる吉野に土着している人々の話しや吉野に伝わる伝説に対しては、付属的なとらえ方しかしていない。「私」は書き記された歴史書を土台にすれば、自らの歴史小説の価値が保証されると強く信じているようだ。

「私」の中での両者の区別というものは、「書かれたもの」と「語られたもの」という伝達媒体の違いである。「書かれたもの」は、専門の歴史家等によって余計な部分、つまり伝説と「史実」が取捨選択されて、重要な部分だけ、つまり歴史的事実だけが抽出されたものであるととらえているのである。

二 大谷家での話し

そういった歴史小説構想を持って「漫然たる行楽の方が主であった」という姿勢で吉野への旅へ出発した「私」であったが、吉野で出会った人々や吉野という場は「私」の歴史的事実に関する認識に疑問を投げ掛けることになる。

「私」はいよいよ異空間性をはらんだ吉野の奥へと足を踏み入れ、^{注6} まずは、菜摘の里へ友人津村の親戚にあたる大谷家を訪れる。津村の話しによれば、大谷家は浄瑠璃の「義経千本桜」に登場する静御前の初音の鼓の実物を家重代の宝として所蔵しているというのである。「私」は浄瑠璃という伝統芸能の中に出てくる初音の鼓を所蔵しているということに胡散臭さを感じながらも、初音の鼓は「私」にとっても幼少期を彷彿とさせる、思い出深い品物でもあるので半信半疑ながら、津村について大谷家を訪問することになる。しかしいざそれらの品物を目の前にしてみても、義経の

愛妾であつた静御前が在りし日に直接賜つたというような品物であるとは到底思えないものばかりであつた。「葉摘邨来由」と題する巻き物は、原文は紙が焦げた如く汚れていて判読できず、そのために備えてあると思われる写しの方も、誤字誤文が夥しく振り仮名にも覚束ない所があつて、素人の「私」が見ても正式の教養ある者の筆に成つたとは信じられない。また太刀・脇差・靱等を手に取つてみても保存状態が悪くぼろぼろに痛んでいて「私」たちには鑑定できるものではなかつた。また「私」と津村が大谷家を訪問する目的となつた初音の鼓だというものも、肝心の皮はなくてただ胴ばかりが桐の箱に収まっていただけであつた。このように大谷家の主人が見せてくれたものは「私」が歴史のあり方として最も重視する歴史書には決して取り上げられることのない品物ばかりなのである。大谷家の主人が恭しく見せてくれた品物やその品物に関する言い伝えというものは、大谷家の人々の中で語り伝えられてきたものである。

しかし大谷家の主人にとつては、先祖から伝えられてきたこれらの品物や言い伝えというものが、大谷家にとつての「歴史」を形づくるものなのである。「心中何の疑ひもなく、父祖傳來の此の記事の内容を頭から盲信してゐるらしい顔つきである。」と「私」がいうように、大谷家の主人はそれらの品物や言い伝えに対して

当初から何の疑いを抱くこともなく父祖傳來の言い伝えを受け入れている。大谷家の先祖代々受け継がれているこれらの品物は、一般に流布している歴史の中の静御前の実在を証明するための品物というよりも、「此の家の遠い先祖が生きてゐた昔、——なつかしい古代を象徴する」意味合いの方が強い私的な品物といえるのである。大谷家の人々が先祖の言い伝えを疑うことなく自分たちの身の上にひきうけて、代々語り伝えていく理由は「祖先」に對し、「主君」に對し、「古へ」に對する崇敬と思慕の情とを寄せてゐる」ためである。このように大谷家の人々は物事をとらえる主観的な視点というものを重要視しているのである。

自分たちの存在のルーツである先祖たちの手から手へと品物が伝えられ、またその品物についての由来が今に語り伝えられてきている。そのことは品物が存在し続けてきた以上に、まぎれもなく自分たちの先祖が存在し続けてきたことをも意味するのである。大谷家の人々にとつては、自分たちの先祖の存在の連続性というものが自分たちの「歴史」を形づくっているのである。

三 津村の母恋いの話し

大谷家で見せてもらつた初音の鼓を代表する品々は、「私」とつては静御前のものであると確信できるものではなかつた。しか

しその初音の鼓を見ることが自体を今回の旅の目的の一つにしていた友人津村の反応からすると、彼の目的を十分に満たすことができるような意味ある品物だったようである。そしてその執着を裏づけることになる津村の亡き母に対する思いが語られるのである。しかし幼い時に死別したためか、津村の中に母が実在していたという実感が全くといっていいほど存在していない。そのかわりに津村の中にある母の倂は、大阪に昔から伝わる浄瑠璃と、生田流の箏曲と、地唄という土着の音楽に色々な形で結びつけられて記憶されているものであった。^{注7} その中でも特に津村の中で母の唯一の倂とつながっている音楽が、生田流の箏曲「狐囃」という曲であった。子が母を慕うという母子関係を唄っているようにも解釈することが可能なだけに津村の記憶に深く刻みこまれたのかもしれない。しかしその鮮明な曲の印象とは対照的に、津村の記憶の中の母の実在感はかなりあやういものである。津村が母の姿を実際目にしたと感じる映像も後年の祖母の話しによれば、その婦人は祖母自身であり母ではなかった、といとも簡単に否定されてしまう。そうなる唯一母を目にしたという記憶もなくなり、自分の記憶の不確かさが露呈するわけだが、にもかかわらず、津村の中の母の倂がかき消されてしまうわけではなかった。実際に目にした時の映像の記憶よりも津村にとっては音の記憶の方が重

要なのである。それは津村自身の身体的な感覚というもので曲を受け止めたゆえといえるだろう。幼い折りから、固有の音楽に囲まれて育った環境というものが津村にそういう体得方法を与えたのである。曲の雰囲気を身体的な感覚でとらえながら、津村は自分自身と母との関係を地唄に歌われている作品内容に投影していくのである。

自分は子供ながらも、「我が住む森に歸らん」と云ふ句、「我が思ふく心のうちには白菊岩隠れ蔦がくれ、篠の細道掻き分け行けば」など、云ふ唄のふしのうちに、色とりどりの秋の小徑を森の古巢へ走って行く一匹の白狐の後影を認め、その跡を慕って追ひかける童子の身の上を自分に引きくらべて、ひとしほ母戀ひしさの思ひに責められたのであらう。

母親と関わり合った確固たる実感のない津村にとって、芝居の中で母親を恋い慕う子供へと自己投影することで、今は亡き自分の母親と自分との触れ合いを初めて実現させているといえるだろう。自分の記憶だけではもはや埋めることのできない母の実在感の喪失を、大阪という土地に受け継がれてきた地唄などの伝統芸能の中に自己投影することで取り戻そうとしているのである。すなわち津村の中の「心理的事実」としての母親像が定着していくのである。

音の記憶と結びついたおぼろげな母の倂と生前の祖母から得た、母が若い頃の手紙などのわずかな事実を携えて、津村は母の故郷である吉野へと足を踏み入れていくのである。そこで今度津村は様々な母に関する事実と出会うことを期待するのである。

ようやくたどりついた母の実家で津村を待ち受けていたものは、津村の母の姉にあたるおりと婆さんのわずかな記憶と、母が所有していたと思われる琴一面であった。それらのわずかなものでも津村にとっては、母の存在を津村自身の記憶だけでなく客観的に証明することのできる材料だったのである。しかし、津村にとって母に関する数々の事実の断片というものは、母の实在を形づくり証明する唯一の材料としてとらえられているのではなく、あくまでも津村の記憶の中の母のおぼろげな倂をより鮮明にする「媒体」としてしか働いていないのである。今まで知り得なかった事実を手に入れたからといって、その事実だけに基づいてあいまいだった記憶だけが塗り替えられていくわけではない。あくまでも津村にとっては、記憶の中の母の倂が津村にとっての母の姿となっており、数々の事実との出会いによりその倂が少しずつ鮮明になっていくのである。

また津村の吉野訪問において、母に関する事実との出会い以上に目をひいたものがあつた。それは紙である。吉野を訪れる前に

も母の形見の品である手紙を手にしたことで紙との運命的な出会いを果たしていた津村であつた。その紙には手紙の内容よりも「自分の母を生んだ人の血が籠つてゐるのを感じ」て、しっかりと肌身に押し戴いたのであつた。そして今度は吉野を訪れ、国栖村の前にして津村の目の中に飛び込んだのは此處彼處の軒下に乾してある紙であつた。津村にとって母の故郷である吉野で見る紙というものは形見の手紙からつながる因縁の糸で結ばれた存在であるといえるだろう。

そしてなつかしい村の人家が見え出したとき、何より先に彼の眼を惹いたのは、此處彼處の軒下に乾してある紙であつた。恰も漁師町で海苔を乾すやうな工合に、長方形の紙が行儀よく板に並べて立てかけてあるのだが、その眞つ白な色紙を散らしたやうなのが、街道の両側や、丘の段々の上などに、高く低く、寒さうな日にきら／＼と反射しつゝ、あるのを眺めると、彼は何がなしに涙が浮かんた。此處が自分の先祖の地だ。自分は今、長いあひだ夢に見てゐた母の故郷の土を踏んだ。此の悠久な山間の村里は、大方母が生れた頃も、今眼の前にあるやうな平和な景色をひろげてゐたゞらう。四十年前の日も、つい昨日の日も、此處では同じに明け、同じに暮れてゐたのだらう。津村は「昔」と壁一と重の隣りへ来た氣がした。

ほんの一瞬間眼をつぶつて再び見開けば、何處かその邊の籬の内に、母が少女の群れに交つて遊んでゐるかも知れなかつた。

自分の母を生んだ人の血が籠つた紙を押し戴くことで母親の實在の可能性を信じていた津村であつたが、吉野にきてあたかも見えない因縁の糸でつながっているかのようなたくさんの紙を目の前にして、この地に母は確かに實在していたんだということを確信するのである。母が實在していた時代にも津村が今目になっているように、吉野の此処彼処には紙が乾されていたことだろう。そしてその一枚を津村の母の母親が手紙として書き送つたのである。實在する紙という因縁の糸を媒介にして、津村は記憶の中の臆氣な母の倂を今度は吉野という地にしっかりと足をつけた形で鮮明につむぎだしていくことが可能になつたのである。母がこの地に「いた」ことを臆氣に信じ続けるのではなく、「いる」という時間があつたことを確信したのである。それは過去と現在の間で滯っていた時間の流れを、一気に押し進めたかのようである。津村の存在する「いま・ここ」にはもはや母の實在はない。母は常に津村の記憶や想像の中にだけ倂として存在している。津村の生きてゐる現在から、母が實在していた過去へと思いをはせる。その過去と現在の間の、今となつては知り得ない未知の部分埋め

ていこうとして行つ「想像」と、母に関する事実の断片が出会い過程の中で、初めて母の姿は鮮明に浮かび上がるのである。

四 『吉野葛』という〈歴史小説〉

津村の母に対する深い思いが語られたあと、今回の津村の吉野行の真の目的が語られる。「あゝ、さうなんだよ。——どうだらう、君、僕はその娘を嫁に貰ひたいと思ふんだが、——」と、母への思慕を未来へも引き継いでいくかのように母の血をひく遠縁のお和佐を嫁に迎えたいというのである。そして津村はその目的遂行のための了承を得るために昆布家へ、その間「私」は今回書き記そうと計画している歴史小説の資料を採訪するために、五、六日の予定で更に奥深く吉野川の源流地方を究めて来ることになつた。ここにきてやっと「私」の歴史小説構想の展開が再び語られるはじめ、完成の道を進むかのように思えた。しかし自天王の史実の舞台であると信じていた三の公谷に関して得た私の結論というものは大變興味深いものである。

八幡平から隠し平までは往復更に三里弱であつたが、此の路は却つて朝の路よりは歩きよかつた。しかしいかに南朝の宮方が人目を避けてをられたとしても、あの谷の奥は餘りにも不便すぎる。「逃れ来て身をおくやまの柴の戸に月と心をあは

せてぞすむ」と云ふ北山宮の御歌は、まさか彼處でお詠みになつたとは考へられない。要するに三の公谷は史實よりも傳説の地ではないであらうか。

今回の旅で実際に訪れたことによって、「私」は今までの三の公谷に関して持っていた「史実の場」という認識を、「伝説の地」であると、決定的に思い直したようである。三の公谷は単なる伝説の場ではなく、「史実」に基づく場であるという「私」の認識のもとに今日の歴史小説構想も生み出されたわけなので、これで当初の「私」の歴史小説構想は土台を壊され、根本からくつがえされた形になる。そして「私」が最終的に至った歴史小説構想に関する結論というものが出来ることになる。

私の計畫した歴史小説は、やゝ材料負けの形でとうとう書けずじまつたが、此の時に見た橋の上のお和佐さんが今の津村夫人であることは云ふ迄もない。だからあの旅行は、私よりも津村に取つて上首尾を齎した譯である。

しかしここでの「私」の言葉の、表層的な意味を鵜呑みにすることとはできないのではないか。冒頭の言葉や、作品の流れから見ても、歴史小説の内容に関する「材料負け」というよりも、今回吉野へ旅することによって出会った吉野の人々、津村の話し、そして様々な歴史や伝統芸能が繰り広げられた痕跡を抱え込む多層性

を帯びた吉野という場所自体もが「私」の当初の歴史小説構想を断念せざるを得ないような意識の変化をせまつたと考えるのが妥当であるといえるだろう。

まず三の公谷での体験は、「私」の歴史書への盲信を決定的に打ち崩す要素を提示した。

案内者の云ふのに、昔から王の住んでいらした谷には、必ず御前申すと云ふ岩と、べろべどと云ふ岩がある、だから四五年前に東京から或る偉いお方、——學者だつたか、博士だつたか、お役人だつたか、兎に角立派なお方が此の谷を見に来られて、矢張自分が案内をした時、そのお方が「此處に御前申すと云ふ岩があるか？」とお尋ねになつたから「へい、ございます」と云つて自分があの岩を示すと、「ではべろべどと云ふ岩はあるか？」と、重ねてお尋ねになつたので、「へい、ございます」と、又その岩を見せて上げたら、「成る程、さうか、それなら此處は自天王のいらした所に違ひない」と、感心してお歸りになつた、——など、云ふ話をしたが、その奇妙な岩の名の由來は分らなかつた。

この事実は、「私」にとっては、歴史に関することに信頼をおいていた専門家たちが、実は歴史に関する専門家と呼ばれるには程遠い地元の案内者の説明されるがままの事柄を鵜呑みにして、その

ことを信用していたという状況を聞き知ることであった。「私」が「史実」というものを探る際に信頼できる唯一のものであると信じていた歴史書の中味も、単に歴史家たちが三の公谷の案内者から教えられた伝説などを信じて書き記していたものであり、その内容を「私」は伝説とは異なる唯一の「歴史的事実」であると考えていたわけである。しかし歴史書という形で記されている「史実」は、歴史家たちがそれを大きな歴史的な出来事だと思っているから書き記したものである。重要であることも、実はそれぞれの歴史家たちがそれぞれに判断を下していたことなのである。

このように三の公谷での経験が「私」の歴史小説の土台となる歴史書及び、歴史家に対する決定的な不信感を抱かせることになったのも、結局は大谷家などでの経験が大きく左右しているという考えに至るのは容易なことだろう。「史実」に関する内実を知った今、多大なる信頼をおいていた歴史書への疑問というものが沸き上がってくるのである。大谷家の「由来書き」を「私」が疑問視していた理由は、その巻き物の誤字脱字が夥しく、振り仮名等にも覚束ない所が多々あって、到底正式な教養ある者の筆に成ったとは信じられないという、自分の信じる歴史書を基準としたときに生じる差異のためであった。そしてそれ以上に歴史家に対する「私」の多大なる信頼性というものを考えると、その巻き物を

保存していた大谷家の主人が、歴史に関する専門的な知識を持った人ではなく、先祖の言い伝えという不安定な内容をただただ盲信していた一介の農夫だったという理由も考えられる。しかし結局歴史家たちの書き記す歴史書も、大谷家の人々に代々伝わる「由来書き」も、過去に起こった事柄の真实性を信じる人々によって書き留められたものなのである。大谷家の人々はあくまでも歴史というものを自分たちの存在に引きつけて主観的なとらえ方をしていた。一方歴史家たちは、一見自分たちとは全く関わりのない出来事を客観的に再現してみせようと試みてはいるが、結局はそれぞれが自らの主観で選び取った歴史の正当性というものをあらわしているに過ぎなかったのである。大谷家の人々が自分たちの私的な空間に伝わる事実を信じてきたように、歴史家たちもまた、それぞれの立場において歴史をとらえるという私的な空間の中でとらえてきた「史実」だったのである。

また津村の口から語られた「母恋いの話し」は、大谷家の「由来書き」以上に私的な事柄であった。しかしそういった私的な事柄だとはいえ、津村のように自分の母親に関して全く知り得なかった数々の事実と出会うことによって、未知なる存在であった母の実在感を津村なりにさぐり形づくっていくという一連の作業は、「私」が構想している歴史小説に影響を与える公的な歴史のあ

り方とくらべると、いわゆる自分史の探求ということにつながるといえるだろう。自分を生んでくれた母、そしてまたその母を生んでくれた両親のことを理解するということは、「いま・ここ」にいる自分の存在の歴史を理解するということである。津村の中にある母に関する倂というものは、おぼろげな幼い頃の記憶でしかなかった。それも実際に母に触れたという実感や、共に過ごしたという記憶というものも残っていない。それは実体感の伴わない、実に不鮮明であいまいな記憶でしかなかった。だから記憶の中の母の姿というものも、肉体を持った母の姿というものを思い浮かべるのではなく、地唄を代表とする「音」の記憶とおぼろげな母の倂を結びつけることによって津村の身体に感じられた記憶というものである。母の存在していた当時から変わらずに存在し続ける芸能の世界に自己と母親の姿を投影することで、実際には味わった記憶のない自分と母の実体感を伴った出会いを「想像」することによって、徐々に津村は母の存在を形成していったのだといえる。

そのような倂を携えて津村は吉野の地で母が実在していたことを証明する数々の事実に出会うことになる。それらは明らかに母が実体を持って過去に存在していたという記録でもある。母は確かに、津村の記憶の中だけに存在しているものではないというこ

とが客観的に証明されたのである。しかし津村はいざ事実に対面した時も、与えられたそれらの事実を鵜呑みにするのではなく、まず自分の中に長年存在してきた母に関する身体的記憶に照らし合わせることによって、初めてそれらの事実を自分の記憶の中に組み入れていくのである。ここには、客観的な事実よりもあくまでも主観的な記憶というものに対する津村の信頼というものがうかがえる。そして事実を目の前にして津村が行うことは、その事実をもとにしながら在りし日の母の姿というものを「想像」することである。その事実というものはあくまでも母の倂を導き出す一つの媒介物であって、その事実という媒介物を手にした時から津村は自分の記憶の中の母の姿と事実を「想像」という作業を通してつなぎあわせることによって、そこから新たに事実の介入により鮮明になった母の姿というものをつむぎだしていくのである。事実というものを手にしたところで、それらの過去の事柄に関する本当の真実性というものを、津村自身が直接自分で納得のいくように確かめる術というものはすでに残されていないのである。確かめる術のない過去の事実に関して、あと津村ができることといえば「想像」することなのである。そして「想像」という、現在から過去への空白を埋める作業を通して、とぎれていた時間の連続性というものも生み出されていくのである。津村はとぎれ

ていた母に関する過去と現在の空白を、事実を媒介にしながら「想像」することで、一つの時間の連続性を生み出していったのである。

そしてこれらの津村の母の存在に対するアプローチは「私」の当初の歴史書に対する絶対的な信頼も裏切られた今、歴史に対するとらえ方を改めて考えさせられる結果となった。どんなに自身自身の存在との関わり合いが遠い自天王の歴史であっても、現在の時点からは直接確かめる術のない過去の出来事をとらえるときには、その時間の隔たりの間に広がる空白を埋めるために「想像」することが重要になってくるのである。現在の時点で与えられる事実を享受するだけでは、過去に起こった事柄の把握にとどまるだけであって、時間や存在の連続性をはらんだ歴史の把握にはつながらないのである。^{注8}当初の「私」は、事柄を手にしただけで自天王の歴史をとらえたかのように満足していたのである。しかし津村の話しにじつと耳を傾け、津村の過去に対するとらえ方に接することによって、客観的な事実の提示に対するリアリティーよりも、自分の身に引きつけて身体的に享受していく記憶のリアリティーのほうがより強く感じられるということを、「私」は改めて感じたといえるだろう。

このようにみえてくると消極的な聞き手役としてのだけの「私」の

存在が強調されているように思えたが、様々な人々と出会い、無言のうちにも多くのことを吸収したことによって、「私」の中の歴史に対する考え方を徐々に変化へと導いた内部の動きは活発だったのである。それに加えてもともと「私」の存在のあり方の基盤として、津村や大谷家の人々と同じような自らの感覚に寄り添った物事のとらえ方が出来る資質を備えていたということも忘れてはならない。^{注9}

そして「私」はそういった津村や大谷家の人々との関わりを通して、ある一つの結論を導き出したのである。自分の知り得ない過去というものに接していく際には、それらの事柄の起こった過去の時点にまで自分自身で「想像」するという主観的な感覚で物事をとらえながら思いを溯らせていくことがまずは重要である。そしてその「想像」という過程において客観的に知り得た事柄の断片と主観的な記憶の隙間をつなぎあわせることにより、今となつては明確にし得ない事柄をより鮮明に認識していくという「運動」を経てとらえることができるのが〈歴史〉なのである。

〈歴史〉の認識はその時の事柄を享受するのではなく、常に動き続ける大きな時間の流れの中でとらえる必要があるのである。客観的な事柄を享受するだけでは、感覚の「運動」は見られない。つまり、主観的な感覚の「運動」が〈歴史〉の「運動性」の認識

にもつながっていくのである。まさしくこの感覚は、「私」の身体を通して得た結論だといえるのではないか。歴史という大きな流れを見るにあたっても、歴史書というある意味で他人の「想像」の産物である一点を見つめるという作業だけしかできなかった「私」であったが、歴史小説構想後の吉野行という機会を自分の意志ではないにしても得たことによって、「歴史」の「運動性」ということを勝ち得た体験だったといえるだろう。そしてそういった身体的に勝ち得ることができた「歴史」の「運動性」という結論を得るまでの過程を書き綴ったのが『吉野葛』という新たな意味での「歴史小説」なのである。

むすびに

「私」は当初の構想とは異なるけれども、動的な「歴史」の過程を綴った『吉野葛』という「歴史小説」を書き記すことになった。そして、作品の構成の中で目につくのが、書き手である「私」が書き記した作品『吉野葛』中において、これから読むであろう「読者」をかなり意識した構成をとっているということである。このことから単に歴史小説を断念し、母恋いの物語を書き記すことになったとは思えず、『吉野葛』という作品を手にしたときの「読者」の姿や感覚をある程度予測した上の、「読者」に対する作

者「私」の明確なアピールが読み取れるのである。つまり、歴史小説の失敗・断念を書き綴ったのではなく、結果的に当初の歴史小説構想における誤りを踏まえながら、「私」が吉野を旅したことにより得た根本的な「歴史」に対するとらえ方に達するまでの過程を書き綴ったのである。そしてその決断から『吉野葛』という作品が出来上がるまでの過程というものが「私」が最も「読者」へ示したかったものになるだろう。そして「私」は「読者」に対して『吉野葛』で行なってきたような歴史小説構想の断念も含めた様々な経験を自分史の中に取り込む過程を提示したことによって、今度は「読者」に対してもそれぞれの自分史に関わる「想像」をも要求しているのではないか。「私」が当初の歴史小説構想を断念するまでに至ったように、「読者」の側にも自分史との対応の中で『吉野葛』という作品を自分史の中に取り込んでいく可能性というものは十分にある。『吉野葛』の中には「私」と吉野での体験との関わりの他に、「読者」と『吉野葛』との関わりというものも含まれる二重構造になっているのである。吉野での様々な出会いが「私」に大きな変化を与えたように、『吉野葛』を手にした時から「読者」にとつての新たな「歴史」の始まりともなるのである。作品の冒頭から「私」は吉野にまつわる様々な歴史的な出来事や様々な伝統芸能について説いてきた。その作業というものが結果

として「私」の意識する『吉野葛』を手にし、読むであろう「読者」の中にも、吉野に関する様々な知識として積み重ねられてきたのである。それは「読者」にとって、吉野を主観的感觉でとらえ直す際の重要な媒介物として機能することになるだろう。それはある意味「読者」にとっての〈歴史〉的一幕となり得るのである。

注

注1 伊藤整「解説」『谷崎潤一郎全集』（昭和33・1 中央公論社）

注2 平山城児「考証『吉野葛』—谷崎潤一郎の虚と実を求めて」（昭和58・5 研文出版）

注3 永栄啓伸「谷崎潤一郎『吉野葛』考—母恋いの輪唱と変奏—」（昭和61・10 「日本近代文学」）

注4 平成2年5月号の「日本近代文学」において「小特集・『語り』の位相」の特集において、千葉俊二「狐のレトリック—『吉野葛』の語りをめぐって—」、金子明雄「『吉野葛』の物語言説と「私」の位相」、藤森清「〈語り〉の機能—『吉野葛』の場合」が発表され、平成4年12月には小森陽一氏が『縁の物語—『吉野葛』のレトリック』（新

典社）を発表し、これらを機に『吉野葛』における「語り」の分析が本格的に行われるようになった。

注5 篠崎美生子氏は「『吉野葛』—〈事実〉からは書けない小説—」（平成4年10月「文芸と批評」）において、歴史小説構想のあり方を「紀行文をメインプロットに見せ掛けながら、その影で（中略）極めて微妙な〈母恋い〉のモチーフを無理なく提示するための、周到な用意だったとは考えられないだろうか」としている。

注6 吉野という場所の異空間性というものは、今までの研究史の中でもよく指摘されている。前出の永栄氏や千葉氏も含め、東郷克美氏なども「狐妻幻想—『吉野葛』という織物」（昭和62年4月「日本の文学」）の中で述べている。

注7 津村の感覚の中には「音」ととらえる感覚が鋭敏であるという特徴は、「私」の津村の紹介の仕方や語り口の使いわけからもうかがえる。

注8 E・Hカーの著作『歴史とは何か』（昭和37年3月 岩波書店）の中に実に示唆に富んだ言葉がある。「歴史とは歴史家と事実との間の相互作用の不断の過程であり、現在と過去との間の尽きることを知らぬ対話なのでありま

す。」まさしくここで言われているように、過去の事柄と自分自身が向かい合い、対話することによって初めて未知の事柄である過去の出来事が把握できることになるであらう。

注9

「私」が吉野へ足を踏み入れ、妹背山をとらえる時に、目の前にある実景を自分の見たままに「写實的」に描き出すのではなく、必ず自分の中にある幼少の時の記憶や、以前に見た芝居の記憶や文学作品に登場する「吉野」などに照らし合わせることで初めて吉野の実景を実感しているのである。それは津村たちと同様に自らの感覚に寄り添ったとらえ方をしているといえるだろう。

（さかにし きみ 一九九八年修士課程修了）